

作品介绍 第1回 「中世のざわめき ビューティツヒハイム」

第1回目の紹介作品は、ドイツの中世都市を描いた作品です。

古来より交通の要所として繁栄していた中世都市の広場、明るい陽光の下での喧騒を再現している。(2007年12月制作)



ドイツの若い医師エルフィン・フォン・ベルツが日本政府の招きに応じて極東の国、日本に来たのは明治9年であった。それから約30年間、東京帝国大学で多くの日本人医師を育てたが彼の故郷はシュツットガルトに近いビューティツヒハイムという地方都市であった。ベルリンの図書館でビューティツヒハイムと思われるドイツの古都のモノクロ銀板写真を見つけて、ベネチアの風景画家カナレット（Canaletto）の色調に倣い油彩画として再現してみた。

今、東大病院の前にはベルツ博士のブロンズの胸像が静かに時の流れをみつめている。

(注)

*ベルツ博士

化粧水「ベルツ水」の処方調整し、また、「ベルツ通り」の名が残る草津温泉を世界に紹介をした

*カナレット

イタリアを代表する風景画家。中世のベネチアの街並みを正確な透視図法を用いて詳細に描写した作品を数多く残している

作品介绍 第2回 「アルルの小径」 2018年7月制作

2月末に個展を開催された高校15期坂本成さんの絵画作品介绍、2回目です。
2回目は、フランス南部プロヴァンス地方、地中海に面した古都アルルが舞台です。
著名な画家ゴッホはこの地に長く留まり「アルルの女」をはじめとして多くの作品を残しています



紀元前のアルタミラの壁画を起源としてヨーロッパで生まれた油彩の技法や材料は、産業革命まで高位の王侯貴族からの注文で肖像や歴史画などが描かれることで存続してきた。その当時は薄暗い工房の中で顔料の破碎から調合、運筆まで多くの職人が分業で制作していたが、19世紀になって薄い鉛板で出来た容器（チューブ）が発明されると屋外での制作が可能となり、南仏の陽光の下で多くの画家が傑作を遺した。印象派の出現である。

ゴッホは「跳ね橋」の画面で陽光と対をなす陰をセルリアンブルーで描いている。

私が滞在した南仏アルルの民宿はパン屋の3階にあった。
朝の窓の下の小路にはセルリアンブルーの影が出来て涼しい朝の風が吹き抜けていた。

*注：セルリアンブルー：ラテン語で「空色」を意味する Saelum が語源の色名。
「空色」は緑みを帯びない明るい青であるのに対して
僅かに緑みを帯びた鮮やかで濃い空色

作品介绍 第3回 「プロバンスの夜明け」

第3回も前回のアルルに続いて、南フランス・プロヴァンス地方の朝の田園風景です。



南仏プロバンス地方は南は地中海、西はローヌ河、東はイタリア国境に囲まれた温暖な地域。

ある日の早朝、アルルを出てローヌ河に沿ってアヴィニオン、ルシオンなどの街を通りラヴェンダー畑を過ぎる頃、ようやくあたりが明るくなってきた。

荒涼とした平原の所々に赤いポピーが群生していて、薄い花卉が揃って風にゆれている。

(一口メモ)

- *アヴィニオン：ローヌ河河口のアルルから河沿いに車で1時間ほどの中堅都市、ローマ帝国時代からの歴史ある古都
童謡「アヴィニオンの橋の上で」で良く知られた、また、14世紀の「アヴィニオン捕囚」の舞台ともなった町
- *ルシオン：アヴィニオンから車で1時間強、「フランスで最も美しい村」に選ばれた村の一つ
- *プロバンスのワイン
フランスワインと言えばボルドーとブルゴーニュですが、フランス最古のワイン産地はプロヴァンス地方、今でもフランス最大の”ロゼワイン”産地です

作品紹介 第4回 「夏の終わり（プロバンス）」

今回の坂本さんの作品紹介も、南フランス・プロヴァンス地方を描いた作品です。フランス東部を北から南に流れる大河ローヌ河の流域は風光明媚な村々を抱える田園地帯です。ゆったりとした流れは時間が経つのを忘れさせるかのようです…。



ローヌ河 (Le Rhone) は「天空の村」と呼ばれるゴルド (Gordes) のある北部の丘陵地帯からプロバンスの草原を穏やかに流れて地中海へと注ぐ大河である。

河は豊かな水を湛えて流れ、草むらの野アザミがプロバンスの夏の終わりを教えてくれる。

(一口メモ)

ローヌ河：スイスの氷河を源流とし、フランスで地中海に注ぐ全長 812 km の大河で、アルルは河口の三角州地帯に、アヴィニオンも川沿いの歴史ある都市です

ゴルド：プロヴァンス・リュベロン地区は「小さな可愛い村の宝庫」と称されている。

丘の上の城塞から岩肌にへばりついたゴルド村は、「フランスで最も美しい村」との評価を得ている

作品介绍 第5回 「トゥールネル橋の朝」

坂本さんの作品介绍、今回からは花の都パリです。



パリ中心部の早朝、これから始まる賑わいを静かに待っている雰囲気伝わってきます。

パリで朝はいつも同じ道を歩いた。

セーヌの中洲の島、シテ島には隣接するサン・ルイ島からも行ける。

ホテルから5分、先ずトゥールネル橋 (Pont de la Tourneville) でサン・ルイ島に行き、小さな橋を渡ってシテ島に着くとノートルダム寺院の美しい巨大なバットレスが目の前に現れる。(この画面にはノートルダム寺院はありません。画面の外、左側になります。)

春の川風を浴びながらの散歩だった。ノートルダム寺院が火災を起こす3年ほど前であった。

(注1) この作品は、2016年6月下旬に現地でスケッチ、撮影等の取材をし、帰国後2021年1月に完成しています。ノートルダム寺院は、2019年4月19日の夕方大聖堂上部で火災が発生、当時修復中の尖塔とその周囲の屋根が崩落し、2024年開催のパリオリンピックに向けて再建が進んでいます。

(注2) *バットレス：_

大規模な石造教会建築物でドーム屋根などの大重量を支えているのは外壁です。しかしこのとき外壁には外側へ膨らもうとする大きな力が発生します。これに対抗するため外壁を外から支える構造物を外周に設けますが、これをバットレスといいます。

ノートルダム大聖堂では巨大な鳥が羽をたたんでいるかのようなバットレスが、見る人を圧倒する威容を誇っています。

*トゥールネル橋：

パリの繁華街セーヌ川左岸からサン・ルイ島に架かる橋。この付近一帯はパリの街の発祥地であり、現在でもパリの中心地となっている。

作品介绍 第6回 「モンマルトルの朝」

坂本さんの作品介绍、前回に続いてパリの朝です。

パリ市北部モンマルトルの早朝、昨夜遅くまで喧騒に満ちていた街も静けさが戻り、新しい一日が始まろうとしています。



モンマルトルの小さなホテルに泊まりました。早朝、何気なく窓の外を眺めていると昨夜の雪を被って遠くのパリの中心街がキラキラ波のように光っていました。傘をさした女性が一人、坂道を上ってきて濡れた石畳の道を注意深く歩いて窓の下に消えていきました。街もようやく目を覚ましたようです。

(一口メモ)

モンマルトル：パリで最も高いモンマルトルの丘(130m)、ケーブルカーで登った頂からはパリの街が眼下に一望でき、ジャンヌダルクの像を正面に構える白亜のサクレ・クレール寺院が建っています。

19世紀にピカソ、ユトリロ、ゴッホ、ルノワールなど多くの若き画家がアトリエを構えて今に残る名作の数々を制作していた街で、今でも作品の画題となったムーランルージュ等のキャバレーが残るパリ随一の繁華街です。

作品介绍 第7回 「ロワールの教会」

坂本さんの作品介绍、今回はパリから南へ、フランス最長の大河ロワール川流域中流、世界遺産となっているロワール渓谷が舞台です。

ロワール渓谷沿いに 800 kmにも及ぶ葡萄畑、フランスのワイン生産を支える地域でもあります。



フランス中西部、ロワール河流域に広がるロワール渓谷一帯にはブドウ畑に囲まれて、村の人々が祈りの場として通う小さな教会が地区ごとに建っている。どの教会も素朴で個性的である。

(一口メモ)

ロワール渓谷：イタリアとの国境山地からフランス中央部を流れて大西洋に注ぐフランス最長の河。中流域のロワール渓谷には数多の古城が残されていることから「フランスの庭園」の異名を持ち、世界遺産に指定されている。

ロワール渓谷の古城：

ロワール渓谷近傍には、15世紀の城塞から近代までに建てられた300を超える古城があるとされている。その中でも、渓谷最大の城シャンポール城、美しさが際立つシュノンソー城、アゼール＝リドー城が高名である。

古城とワイン：渓谷沿いの一帯はフランス第3位のワイン生産地で、栽培されている20種類の葡萄からはヴァリエーションも豊富。多くの古城はブドウ畑を有しており、古城見学に添えてそれぞれのワインを楽しむことができます。

作品介绍 第8回 「オンフルールのそよ風」

坂本さんの作品介绍、今回はパリから北へ、第二次大戦で連合軍の反撃が始まったノルマンディーの美しい港町です。



オンフルールは遠くノルマンディーにまで達したセーヌ河が大西洋に注ぐ河口の町。デュフィ、コロ、モネなどの印象派の画家たちや、ボードレー、モーパッサンなど多くの文人達からも愛されていたのどかな漁港である。

朝、岸边にびっしりと並ぶレストランやカフェはどこも開店の準備で忙しい。

(一口メモ)

オンフルール

セーヌ川河口、中世に遡る歴史を持つ小さな港町。

石畳が敷かれた道の脇には、ノルマンディー地方独特の木組みの民家が並び、中世にタイムスリップしたような街並みが残っており、何処をとっても“絵”になる街と呼ばれている。

印象派のモネが好んで描いた街でもある。

印象派：

19世紀後半、それまで主流であった「写実主義」に対してパリで起こった新しい芸術主義。

モネが発表した「印象・日の出」は酷評を得たものの、この後「印象派」と呼称される基となった。代表画家として、モネ、マネ、ドガ、ルノアールが挙げられる。

また、この時代にチューブ入りの絵の具が開発され、従来余儀なくされていた室内制作から屋外での制作が可能となったことも、新しい潮流を生み出す契機になった。

作品介绍 第9回 「遠い村」

坂本さんの作品介绍、今回はフランスの南西部、スペインとの国境に近いミディ・ピレネー地方、ピレネー山脈を越えてスペインの聖地に向かう巡礼路の村の佇まいです。

「遠い村」



フランスの南西部、スペインとの国境に近い山岳地帯にロカマドウル（Rocamadour）という街がある。ピレネーの山々を超えてスペイン北西部にあるキリスト教の聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラへと続く800キロの巡礼路のフランス側の宿場街である。

仕事で親しくなったフランス人の建築家が「絵を描くなら1度は訪ねる価値がある景観だ」とここを紹介してくれた。

険しい岩壁に家々が張り付き岩の頂上には10世紀に建てられた聖堂と修道院がある。聖堂に安置された木造のマリア像を礼拝するため信者は岩の階段を膝をついて登っていくという。

（一口メモ）

ロカマドール：

スペインとの国境ピレネー山脈の北部、アルズー溪谷の絶壁に張り付いている世界遺産のキリスト教聖地。10～13世紀にかけて建てられたサン・ソヴール聖堂には、誰にでも平等な試練として216段もの急な大階段が設けられている。

サンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路（ツ・ビュイの道）の途上にあり、起点のル・ビュイからは約200km、フランス国境までは約300kmの地点。

サンチャゴ・デ・コンポステーラ

スペイン北西端ガルシアに位置する、イエス12使徒の一人ヤコブ（サンチャゴ）が埋葬されているとされるキリスト教の聖地で、ローマ、エルサレムと共に3大聖地とされている。フランス国境からの巡礼路は約800km、1000年以上もの歴史があり、今でも年間10万人の人がピレネー山脈を越えて訪れている。

作品介绍 第10回 「グロスターの秋」

坂本さんの作品介绍、今回はフランスを離れてイギリスに移ります。

イングランド中央部はローマ帝国時代からの長い歴史をもつ、また、現在でも古いイングランドの面影を残している地域です。

「グロスターの秋」



2008年の秋にイングランド中央部コッツウォルズ地方を歩いた。

ハチミツ色の石の家や橋が並ぶ観光地バイブリーから西へ数10キロ、知人の住むグロスターの街の郊外で河辺*に座ってスケッチをした。

川面から登る霧も夕陽の逆光を浴びてハチミツ色である。高い樹の枝にカササギが一羽じっとして動かない。

(*注)

河辺： イギリス最長のセヴァン川。ウェールズの丘陵地帯を源流としてウェールズ、イングランドを流れ、ブリストル湾から太平洋に注いでいる。

(一口メモ)

グロスター： ローマ帝国時代からの古い歴史を有するイングランド中央の都市。7世紀に建てられた修道院が起源のグロスター大聖堂は、映画「ハリポッター」のロケ地になった。

コッツウォルズ： イングランド中央部に広がる丘陵地帯。古くから羊毛の供給・取引地として繁栄し、今でも古いイングランドの面影を濃く残している地域。バイブリーは昔の面影を残す代表的な街の一つで、蜂蜜色の石灰岩・ライムストーンの建物群が羊毛取引所を中心に残されている。

作品介绍 第11回 「ブリュージュの朝」

坂本さんの作品介绍、今回はベルギーが舞台です。

ベルギー・ブリュージュ、今なおヨーロッパ中世の景観を残している街です。

「ブリュージュの朝」



中世の海洋貿易で栄えたベルギー西部の街ブリュージュ（Bruges）には至る所に運河が巡り、水辺に沿って並ぶ古い建物には蔦が厚く絡み、人々の落ち着いた日々の暮らしが営まれています。

500年前この町の水路が海に繋がる場所に海流の変化が生じ土砂が堆積したことでこの街の繁栄も存在も長らく人々から忘れ去られていました。しかしこのことがこの街の美しい景観の保存に役立ち、今では「天井の無い美術館」と言われて、世界中から多くの人々が訪れるようになりました。 雨上がりの春の朝、スケッチが出来ました。

【一口メモ】

ブリュージュ：

12世紀に運河を開削して内陸にできた港町でヨーロッパ第一の貿易港として栄えたが、15世紀以降、運河に土砂が堆積し貿易港としての機能を喪失、衰退した。

天井のない美術館：

旧市街を流れる運河沿いに並び立つ教会、鐘楼、及び、中心広場を囲む色鮮やかな建築群は、中世様式を今に残しており世界遺産に指定されている。

フィレンツェ、ヴェネチアと共に「天井のない美術館」との異名を持ち、訪れる人々を魅了している。

作品介绍 第12回 「教会への道」

今回の作品介绍、舞台はオーストリア・ドナウ川随一の景観バッハウ溪谷です。

「教会への道」



ド

イツを起源としてオーストリアを西に流れるドナウ川（Donau）の沿岸にはブドウ畑が広がり、小高い丘の上には中世の城や僧院がつぎつぎと現れます。特に旧都メルクからクレムスまでの35kmの区間は「銀色の輝く帯」といわれる美しいパノラマのような景観が続きます。その街の一つ、デュルンシュタインで船を降りてスケッチをしました。丘の上のスカイブルーの教会はドナウ河でもひときわ目立つ修道院の塔です。スケッチをしていると農家の入り口で少女と老犬が見慣れない旅人をじっと見つめていました。

*ドナウ川の源流はドイツ南部にあるシュバルツヴァルト（黒い森）、オーストリアを含む中東欧10カ国を流れて黒海に注いでいる

【一口メモ】

バッハウ溪谷：ウィーン近くのメルクからクレムスまでがバッハウ溪谷で、両岸のブドウ畑、古城、修道院等がドナウ川で最も美しい景観を生み出している。
デュルンシュタイン：12世紀に建てられたデュルンシュタイン城は、第3回十字軍遠征時英国王リチャード獅子心王が幽閉された城。

作品介绍 第13回 「ドナウの岸边」

坂本さんの作品介绍、今回から舞台はドイツに移ります。ドイツ南部の古都、ハイデルベルグから旅は始まります。

「ドナウの岸边」



ドイツには国が設定した7つの観光街道がある。いずれも中世ドイツの華やかな歴史のある都市間をつなぐ街道となっている。

その一つ、古城街道に古都ハイデルベルグがある。ネッカー川河畔のこの街はドイツ最古の大学がある学生の街で丘の上には14世紀に建てられた重厚なハイデルベルグ城の遺構が川を見下ろしている。ハイデルベルグの少し下流の村でスケッチをした。向こう岸にハーフティンバー様式の家が並ぶ、岸边の村の日曜の賑わい。

(注) ハーフティンバー様式

北ヨーロッパの木造建築の様式。外壁の木製の構造体を一部露出させ装飾を兼ねた工法。

【一口メモ】

7つの観光街道：ドイツ国内の主な観光地を巡る7つの観光コース

- ①古都街道、②ロマンチック街道、③エリカ街道、④ゲーテ街道
- ⑤メルヘン街道、⑥ファン+チック街道、⑦アルプス街道

ハイデルベルグ： 古都街道、ロマンチック街道の中心で、中世の風情が色濃く残る街。ネッカー川近くの丘に建つ古城から見下ろす町並みは絶景として知られている。また、12世紀に創設されたハイデルベルグ大学は、ドイツ最古の大学として今でも学究の街のシンボルである。

作品介绍 第14回 「レーゲンスブルグの朝」

今回の坂本さんの作品介绍、前回に続いてドイツが舞台です。神聖ローマ帝国の議会開催都市であり、今でも中世の面影を色濃く残すレーゲンスブルグです。

「レーゲンスブルグの朝」



ドイツ東部、ドナウ川の北端に位置するドイツ最古の街、レーゲンスブルグ（Regensburg）を訪ねた。

ここは古代ローマ時代に川沿いの要塞として作られその後水上運輸の要所として長く栄え、ドイツでも最も中世の街並みが残る街といわれている。1634年から230年をかけて建てられたレーゲンスブルグ大聖堂は重厚な鉄骨の塔を頂く純粋なドイツ・ゴシック様式である。

今は夏の避暑地としても人気の高い世界遺産の街である。

【一口メモ】

レーゲンスブルグ

紀元70年頃、ローマ帝国軍の宿营地として建設されたのが都市の起源。

6世紀ころバイエルン族が宮殿を建設して以来ドナウ川交易で繁栄を極め、近世まで南ドイツ・バイエルン地方の政治・経済の中心地であった。

神聖ローマ帝国の国会が設置された地であり、帝国議会が頻繁に開かれていた。第二次世界大戦時での被害が軽微であったことから、多くの歴史的建造物が残っており、ドナウ川河畔で最も美しい中世の街と言われている。

作品介绍 第15回 「チェスキークルムルフの春祭り」

今回はドイツの隣国チェコに移ります。チェコの西半分を占めるボヘミア地方、首都プラハの南にある中世の雰囲気の色濃く残す街が舞台です。

「チェスキークルムルフの春祭り」



チェコ南西部一帯はボヘミア地方といわれている。そこを流れる大河、ヴルダヴァ河（ドイツ語：Mordau モルダウ河）が蛇行する谷間に13世紀に出来た街がチェスキークルムルフである。

チェスキークルムルフという名前は「チェコの湿地帯」という意味でクルムルフ城を囲んで世界で最も美しい街として今では世界中から多くの人々が訪れている。ある春の日、人々が集まってお祭りのパレードが始まった！！

【一口メモ】

ボヘミア：

チェコの西半分を占めているのがボヘミア地方で、国名チェコの語源となった地域。牧畜が盛んで、牧童の姿（黒い革の帽子、革のズボン・ベスト）はアメリカのカウボーイの服装の元になったと言われている。

また、15世紀に多くの非定住民（流浪の民）がこの地方からフランスに移動したことから、自由奔放な生活を送る芸術家の呼称”ボヘミアン”が生まれている。

チェスキークルムルフは首都プラハの南の小さな町、クルムルフ城を中心とした中世の面影を強く残し、「世界で最も美しい街」と称されている。

作品紹介 第16回 「ボヘミアの流れ」

今回もチェコ・ボヘミアが舞台です。チェコの首都プラハは悠久の歴史を有する国際都市
ヴルダヴァ河（モルダウ河）はその中央を滔々と流れています。

「ボヘミアの流れ」



チェコ南西部一帯はボヘミア地方といわれている。そこを流れるヴルダヴァ河はチェコ最長の河。オーストリアとの国境の山深い源流からチェスキークルムルフ、首都プラハ市内をとうとうと北に流れエルベ川と合流する。ボヘミア生まれの作曲家スメタナは交響詩「我が祖国」の第2楽章で祖国の母なる川を民族の誇りを持って謳いあげている。ここには長く続いたオーストリア帝国の支配下でのチェコ人、スメタナの想いが込められている。

プラハの手前の川辺に座りこみ、月明かりの下でスケッチをした。

【一口メモ】

ヴルダヴァ河（ドイツ語でモルダウ河）、プラハ：

ドイツ・バイエルンの森を源流として、ボヘミア盆地を横断してエルベ川に合流し、ドイツ平原から北海に注ぐ河で、プラハでは町の中央を流れる。

プラハでは、河の両岸に中世以降の歴代の建築を遺す旧市街、プラハ城の城下町が中世の雰囲気の色濃く残し、「ヨーロッパ建築博物館の街」とも呼称されている。

スメタナ：

チェコを代表する作曲家。チェコの歴史・伝説・風景を描写した連作交響詩「わが祖国」が代表作。第2曲「モルダウ」は特に有名である。

作品介绍 第17回 「ミルク売りの来る街」

今回はチェコの隣国ハンガリー、首都ブタペスト近郊の芸術家が集う都市が舞台です。

「ミルク売りの来る街」



チェコの首都プラハを南東に向かいハンガリーの首都ブタペストに入る。雪の中、さらに北へ40km、芸術の街と言われるセンテンドレに着いた。オーストリアからハンガリーを東へ流れるドナウ川はこのセンテンドレ付近でほぼ直角に南に流れを変えることからこの地方はドナウベントなどとも呼ばれている。

朝早くホテルの窓から雪の街をスケッチしていると、鈴を鳴らしてミルクを乗せた馬車が家々を回っていた。

【一口メモ】

センテンドレ（ハンガリー語：Szentendre）

ハンガリーの首都ブタペストの近く、「ドナウ川の曲り角の宝石」とも呼称され、セルビア文化が色濃く残るローマ帝国以来の歴史を有する都市。

20世紀に入ってから若い芸術家が多く集まり、今では10人に一人がアーティストと言われており、15以上の博物館・ギャラリーがひしめく町となっている。

作品介绍 第18回 「チューリッヒの朝」

今回は東欧チェコを離れ、アルプスの麓スイスに移ります。

国際都市チューリッヒ、歴史ある教会の建物からも朝の静寂が伝わってきます。

「チューリッヒの朝」



スイスの首都チューリッヒの旧市街はリトマ川の両岸に広がっている。

ここではロマネスクやプロテスタントなど多様な様式を持ついくつかの教会を見ることが出来る。雨上がりの朝、向こう岸の美しい尖塔を持つフラウシュンスター聖母教会をスケッチした。比較的新しい教会であろうか壁に1732の金文字が見える。

【一口メモ】

リトマ川：チューリッヒ湖の北端から流れ出し、歴史を伝える数多くの教会が並ぶ旧市街を流れ、ドイツとの国境近くでライン川支流に合流している。

フラウシュンスター聖母教会

市内で一際目立つエメラルドグリーンの尖った屋根を持つ853年設立の教会。聖堂奥の5枚のステンドグラスは、フランスの画家シャガールが手掛けたもので、荘厳な聖堂内を飾っている。

作品介绍 第19回 「霧の朝（フィンランド）」

坂本さんの作品介绍。今回は北欧フィンランドです。

霧に包まれた早朝の港、出航を待つ帆船が静かに時を待っています。

「霧の朝（フィンランド）」



1229年に街の中央に建てられたトゥルク大聖堂がその歴史を語る、フィンランドで最古の地トゥルク（Turku）を訪れた。

ここはバルト海に面した静かな港町で商業と文化の中心地として発展をしてきた。

白夜の朝、港を歩いていて港の片隅で古い帆船を見つけた。

長い旅路を終えて、静かに疲れを癒している老人のたたずまいであった。

【一口メモ】

トゥルク

トゥルクは1229年ローマ教皇によって司教座をおかれたことに始まるフィンランド最古の町。1812年にヘルシンキに移るまでの600年間首都であった。

フィンランド中央を流れてきたアウル川がバルト海に注ぐ河口、フィンランドの南西角に位置する、今でも文化・商業の中心都市。

トゥルク大聖堂

1300年に完成したフィンランド最古の教会。同時代に建てられたトゥルク城と共に、フィンランドの長い歴史を飾っている。

作品介绍 第20回 「ローマの秋（サンピエトロ大聖堂）Ⅰ」

坂本さんの作品介绍も20回を迎えました。

今回からは、明るい日差しに満ちているイタリアが舞台、その初めは、ローマを代表するサンピエトロ大聖堂です。

「ローマの秋（サンピエトロ大聖堂）」



ローマに着いた夕暮れ時、石畳の道をテヴェレ川に沿って散策した。

見渡す限り全てが夕陽を浴びて金色に輝いている。葉を落とした川辺のプラタナスの枝先には丸い実が幾つも下っている。ヴァチカン市国の境界に沿うように蛇行するテヴェレ川にはサンタンジェ橋が架かり、その向こうにカトリック教会の総本山サンピエトロ大聖堂の青銅の大天蓋（パルダッキーノ）が輝いている。

17世紀のローマでは並外れた才能を持つ彫刻家、画家、建築家達はその熱気を融合して多くの傑作にその才能を結実させている。この大聖堂はナポリ生まれの天才、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニにより1633年に完成している。

作品紹介 第20回 「ローマの秋（サンピエトロ大聖堂）Ⅱ」

【一口メモ】

テヴェレ川 (Tevere)

ローマの聖なる川と呼ばれるイタリアで3番目の長い川。

イタリア半島を縦貫するアペニン山脈を源流とし、南下しローマ市中を経てティレニア海に注ぐ。イタリア半島を縦貫するアペニン山脈を源流とし、南下しローマ市中を経てティレニア海に注ぐ。

サントアンジェロ橋 (Ponte Santangelo)

テヴェレ川右岸のサントアンジェロ城の正面にあるバチカンへの参道となっている橋、橋の両側には10体の天使の彫像が据えられている。

サンピエトロ大聖堂 (Basilica di san.pietro)

初めてローマ帝国皇帝としてキリスト教を公認し自らも帰依したコンスタティネスにより313年に建てられた。その後多くの改造や改築を経ている。内陣の青銅の天蓋（パルダッキーノ）はジャン・ロレンツォ・ベルニーニの設計により1633年に完成した。

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ (Gian・Lorenzo・Bernini 1598~1680)

ポリ生まれの彫刻家、画家、建築家。古代遺跡の街であったローマを絢爛豪華な美の都に変えたバロック芸術の巨人と称賛されている。

作品介绍 第21回 「バロックの丘から（シチリア島）」

今回も舞台はイタリア、地中海に浮かぶシチリア島のラゲーザが舞台です。

丘の上に聳える教会の青いドームが、夜明けの空にくっきりと輝いています。

「バロックの丘から（シチリア島）」



ラゲーザにきた。長靴型のイタリア半島のつま先の南部に位置する丘の町である。ラゲーザは東西民族の攻防によって破壊と建設が繰り返された長い歴史を経ている。バロック様式の聖堂、サン・ジョルジョ教会のトルコブルーのクーポラを囲んで古い石灰石の家々が丘を重層的に多い尽くしている。

夜明けの空には無数の星が瞬いていた。

【一口メモ】

ラゲーザ

千年以上も前からシチリア人が住みつき、近隣のギリシャ植民都市と共に発展し、東ローマ時代には要塞も作られていた。848年アラブ人によって占領された後12世紀に至ってシチリア王国が建国された。

1693年の大地震に因って町は大きく破壊されたが、多くのバロック建築と共に再建された。高台の新市街からは、細い路地が迷路のように巡る旧市街を見下ろせる。

サン・ジョルジョ教会

1693年の大地震の後に建設された、旧市街のシンボルとなっているゴシック様式の教会。円柱が特徴的なファサードを抜けて教会に入ると、見事なステンドグラスが迎えてくれる。

クーポラ

教会建築などにみられる、半球状に作られた天井。丸天井、ドームとも呼称される。バチカンのサン・ピエトロ大聖堂も大きなクーポラを有する。

作品介绍 第22回 「ベニスの裏道」

今回もイタリア、「水の都」として世界に名を馳せているベニスが舞台です。

「ベニスの裏道」



ベニス（イタリア語：ベネツィア）はイタリア北部アドリア海のラグーン（干潟）に6世紀に作られた人口地盤の商都である。

東方貿易で得た豊かな財力と、優れた政治体制をもって独立した共和国として繁栄し「アドリア海の女王」と讃えられてきた。

沢山の観光客で賑わう表通りを離れて裏道に入るとそこには街の人々の生活がある。

朝、子供を学校に送るおかあさんに「チャオ！」と声をかけられた。

【一口メモ】

アドリア海 イタリア半島とバルカン半島に挟まれた、地中海域の一部。

イタリアの対岸には、スロベニア、クロアチア、ボスニアヘルツゴビア、モンテネグロ、アルバニアの諸国がある。

作品介绍 第23回 「ベニスの裏道」

今回も前回に引き続き「水の都」ベネチアが舞台です。ゴンドラが行き交うベネツィアの運河、ゴンドリエが巧みなオール捌きでゴンドラを操っています。

「ベネツィアの指笛」



6世紀、アドリア海の干潟に人工地盤を設けて新しい安全な街を創るという発想を現実にしたベネツィアの人々は、そこに建てる建築物にも多くの工夫をしている。

弱い地盤の上に建てる建物を軽くするため、窓を極力多く、広くしているがこのような工夫がベネツィア特有の美しい街の景観を生み出すこととなっている。

ゴンドラが狭い水路を進んで角に近づくと、ゴンドリエは口に指を当てて鋭く指笛をならす。何百年も受け継がれた安全のための作法である。

【一口メモ】 ゴンドラ：

150以上の運河に400を超える橋が架かっている運河を、船尾に立つゴンドリエが片側だけのオールを巧みに操り、時にはカンツォーネを歌いながら漕ぎ渡っている。全長10m、幅1.5mの細長い内部装飾が美しい船。

作品紹介 第24回 「ポンテ・ヴェキオ (Firenze)」

昨年3月から始まった坂本成さんの「精密油彩画」作品紹介、今回が最終回となります。建築家である坂本さんの目を通して描かれたヨーロッパ各地の市街・村々・教会、建物、いずれも臨場感に溢れていて、いかにもその場に居るかのような感覚に捉われます。最終回の今回は、イタリアの文化都市フィレンツェの象徴、ポンテ・ヴェキオです。

「ポンテ・ヴェキオ (Firenze)」



とうとう「花の都」であり「ルネッサンス発祥の都」フィレンツェにきた。アルノー川に架かるベッキオ橋の向こうに夕陽が沈もうとしている。この橋を見ていると浮かんでくるメロディがあります。プッチーニの喜歌劇「ジヤンニスッキ」の中で豪商スキッキの一人娘ラウレッタが歌う可愛いアリア「私の大好きなお父さん ♪O mio babbino caro ♪」。「あの方と結婚させてくれないならベッキオ橋から飛び込むわ」サアたいへん。娘に弱い父親はいつの世にも同じです。

【一口メモ】

フィレンツェ：

イタリア半島中部、アペニン山脈を源流とするアルノー川の中流・トスカーナ州にあるフィレンツェ、川はさらに斜塔で有名なピサを通して地中海へと注いでいる。中世には金融業と毛織業で栄華を極めたメディチ家の本拠であり、15世紀のイタリアルネッサンスでは花開いた文化の中心地であった。フィレンツェの名は、ローマ帝国の植民地であった時代の「花の神フローラの町」に因んで名づけられている。

ヴェッキオ橋：

イタリア語で「古い橋」を意味するヴェッキオ橋はフィレンツェ最古の橋。ローマ帝国時代に初めて建造され、現在の橋は 1345 年に再建されたもの。石造り 3 連アーチ式の橋は、今では橋上の両側には多くの宝飾店が軒を並べている。また、この橋の 2 階部分は川の両側にある二つの宮殿（ヴェッキオ宮、ピッティ宮）をつなぐ、かつてはメディチ家の専用回廊であった。

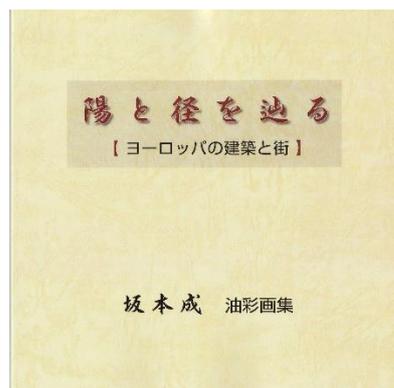
プッチーニの喜歌劇「ジヤンニスッキ」

プッチーニは「蝶々夫人」も作曲したイタリアの作曲家。ジヤンニスッキは彼の最後の歌劇（オペラ）であり、且、唯一の喜歌劇（オペレッタ）。ダンテの「神曲」地獄篇第 30 歌を題材とした、大富豪の遺産を巡る親戚間の騒動と若い男女の恋を解決する様がコミカルに表現されている。

『連載を終えて』

私のヨーロッパを巡る絵の旅もここで終わります。

先日、本連載を中心とした画集「陽と径を辿る」を発刊しました。



画集の編集にあたっては、建築を生業としてきたことから「建築史、建築工学と絵画の融合」を目指しつつ、内容は「建築屋さんのヨーロッパ紀行と絵」と優しくしたつもりであります。この画集の巻末の辞を以て、皆さんへのお礼とさせていただきます。

「高度経済成長期のゼネコンで働き、定年を迎えた 60 歳から手探りで描き始めた油彩画。その数は大小合わせて 400 点余、時には出会った風景に感動し一気呵成に仕上げた絵もあるし、何年も没と加筆を繰り返させた世話の焼ける絵もあった。ふと気が付くと現在 400 余点の殆どが手許から離れている。海外に行った絵もある。昨年、転居をきっかけに手許に絵の痕跡くらいは残したいと画集を作ることを思いついた。

いずみ会の皆さんには長い間お付き合いいただきありがとうございました。

心よりお礼申し上げます。」

*坂本さんの画集「陽と径を辿る」についてのお問い合わせは 下記にお願いします。

坂本 成 東京都練馬区貫井 1-38-1

電話 03-3990-9255

【付表】 坂本さんの作品の舞台となった、都市・地域

